

論文の内容の要旨

論文題目 日本の英語教育と文学教材—1980年代初頭から2000年代初頭までを中心に—
(Japanese English Teaching and Literary Materials from the Early 1980's to the Early 2000's)

氏名 高橋和子

本論のおもな目的は、日本の英語教育で文学教材が減少した経緯を分析し、その事象を不相当と見なす立場に立ち、文学教材の特色および利点を示し、文学はコミュニケーション能力育成を目指す英語教育においても重要な教材であることを、理論と実践両面から示すことである。考察の対象は、おもに1980年代初頭頃から2000年代初頭頃までの期間に絞り、中学校・高等学校の英語教育にも目を向けながら、大学英語教育を中心に論じる。

本論は、序論、結論の他、7章から構成されている。序論では、まず、身近な大学生のアンケート結果に基づき、文学教材を英語の授業で用いることに対して、彼らが概ね好意的に受け止めていることを示す。その一方で、日本の英語教育が1980年代以降、コミュニケーション能力育成重視に変わった背景の下、文学教材が排除されてきた状況を説明する。さらに日本では、「実践的コミュニケーション能力」が狭義に解釈され、実用主義と結びついた結果、すぐに役立つような教材志向に向かった可能性を指摘する。

第I章では、コミュニケーション能力育成に主眼を置くようになった日本の英語教育を背景として、中学校、高等学校、大学ではどのような教材が使用されてきたかに注目する。これらから確認する点は、1980年代以降日本の英語教育の中心目標がコミュニケーション能力育成に収斂していった一方で、すぐに役立つように見える英語を扱う教材が増加し、文学教材が減少していったという実情である。

第II章では、近年、海外の英語教育・外国語教育界で文学教材がどのように扱われているかに注目する。そして、文学教材を日本のように敬遠する国（韓国・中国）がある一方で、CLT

発祥の国と言われるイギリスや、アメリカでは、文学をオーセンティック教材と見なして、外国語教育の場で活用していると指摘する。その上で、日本の英語教育では、コミュニケーション能力育成を重視するようになったことと関連して、オーセンティック教材が注目されるようになったが、同教材が狭義に解釈された結果、「オーセンティック」教材から文学教材が排除された可能性を指摘する。

第 III 章では、コミュニケーション能力育成を目標に掲げながらも、日本の英語教育では、なぜ文学教材を活用してこなかったのか、その理由を考察する。まず、オーセンティック教材のとらえ方を 2 通りあげ、1) 本来の意味で解釈した場合と、2) 狭義に解釈した場合を提示する。そして、日本では一般的には 2) の解釈を行なった場合が多いとする。次に、このような解釈に影響を与えたと思われる時代背景を考察する。具体的には、“World Communications Year: Development of Communications Infrastructures”, JET プログラムと ALT, コーパスの問題にふれる。そして、このような背景の後押しもあって、狭義に解釈された「オーセンティック」教材の概念が生まれ、文学教材は「オーセンティック」ではないと見なされるようになった可能性を示す。加えて、本論のオーセンティック教材に対する、基本的な立場を確認する。すなわち、オーセンティック教材という概念が本来の意味で解釈された場合、この概念自体に問題はないが、オーセンティック教材の概念が狭く解釈された結果、文学が排除されるという極端な事態が生じており、この点は是正すべきであるという立場である。

第 IV 章冒頭では、これまでの議論を踏まえて、「オーセンティック」教材と文学教材の間にはまったく接点がなく、これらは対照的な教材なのか、という疑問を投げかける。その上で、Carter and Nash (1990) による“literariness”の概念を基準にして、「オーセンティック」教材と文学の関係を見る。その結果、「オーセンティック」教材の題材になることが多い雑誌記事の中には、文学の理解を前提として執筆されたものがあると指摘する。そして、文学を英語教育から排除することは、書き手のメッセージを正しく理解すること、ひいてはコミュニケーション能力を育成する上で、最善の策とは言い難いと主張する。本章最後では、「オーセンティック」教材と文学教材の関係を考える上で有益だと思われる、新たな尺度 (creativity と narrativity) を提示する。

第 V 章では、日本の英語教育で「オーセンティック」と見なされることが多い題材には、どの程度 creativity が見出せるかを検証する。はじめに、本論における creativity の意味を定義づける。次に、この定義に従って、creativity をふんだんに含んだ教材はコミュニケーション能力育成を目指す英語教育に有益だと論じる。さらに、「オーセンティック」教材中心に編纂された英語教科書にも、実は creativity を含んだテキストが選ばれていることを示した上で、creativity を十分に含んだテキストを提供するためには、文学の方が適切だと述べる。

次に「オーセンティック」教材として選ばれることが多い題材を例にとって、そこに含まれる creativity を検証する。提示する例は、店の名前のように短いものから、新聞や雑誌の記事、駅の広告板、テレビ・コマーシャル、ツイッターなどである。そしてこれらの題材は、文学の理解を念頭に置いているものが少なくない点を明らかにする。加えて、近年の文学作品の中には、文

字の力を十分に活用し新たな時代に対応しながら、creativity に富んだテキストを生み出している例もあると述べる。その上で、creativity をふんだんに含み、「オーセンティック」教材に含まれる creativity を理解するための前提になり、新たな creativity のあり方をも模索している文学を、英語教育から排除する事態は是正しなければならないと主張する。

第 VI 章では、まず本論における narrativity の定義を示し、次に narrativity を含んだ教材は、コミュニケーション能力育成のための活動に活用しやすいと主張する。そして「オーセンティック」教材中心に編纂された英語教科書にも、実際は narrativity を含んだテキストが選ばれていると指摘する。その上で、narrativity を含んだ題材を提供するためには、文学の方が適切だとする。その理由として、文学は「オーセンティック」教材の題材と比較して、十分に story を展開し、豊かな文脈を作り上げることが多い点をあげる。さらに、文学は映像や音声といった視聴覚的な要素に頼ることが少なく、文字を中心として narrativity をふんだんに含んだテキストを構成していることも示す。そしてこれらの点を説明するために、「オーセンティック」教材の題材として選ばれることが多い、新聞・雑誌記事、テレビ・コマーシャル、日常会話などと、文学作品を比較する。以上の考察を踏まえて、narrativity を豊かに含んだ文学教材を英語教育から排除することなく、学習者の状況を十分考慮しながら、オーセンティック教材として活用するべきであると結論づける。

第 VI 章最後では、第 IV・V・VI 章のまとめを行う。ここでは、“literariness”, creativity, narrativity の観点から見ると、「オーセンティック」教材と文学教材の間には接点があり、まったく関連性を持たない対照的な教材ではないと主張する。加えて、creativity・narrativity を豊かに含んだ教材がコミュニケーション能力育成のための活動に有益である点を踏まえると、文学教材を英語教育から排除してきたこれまでの日本の英語教育のあり方には、再考の余地が大いにありと主張する。

第 VII 章では、さまざまな工夫を加えれば、コミュニケーション能力育成を目指す英語の授業で、文学教材を上手く活用できることを示す。実践例を示す前に、まず、従来型の文学教材のメリット・デメリットを分析する。次に最近の文学教材の特色を踏まえて、コミュニケーション能力育成を目指す英語教育において、文学を十分に活用するための方策を考察する。その上で、大学、中学校・高等学校の英語教育において、“literariness”, creativity, narrativity を豊かに含んだ文学教材を活用するための方法を提案する。

本論文全体を通してもっとも強調したい点は、文学教材はオーセンティック教材の 1 つであり、コミュニケーション能力育成を目指す現在の日本の英語教育でも、十分に活用できる教材であるということである。

「オーセンティック」教材の題材と比較すると、文学には、“literariness”, creativity, narrativity がふんだんに含まれている。このように文学作品が潜在的に持っている力は、文学がどのような状況に置かれても変わることはない。そして、これらの特色は本論で繰り返し強調してきたように、コミュニケーション能力育成のための活動に活用しやすい。

今後は、文学を排除することなく、オーセンティック教材の 1 つとして認めることが求められる

る。たとえ現状では、文学教材を中心に据えた授業の実現が難しくても、まずは短時間でも、英語の授業に文学を取り入れることから始めたい。このような試みは、文学が持つ双方向性を顕在化し、現実的な言語表現との関連性を明らかにし、文学が内包する多彩な意味を〈解凍〉し、さまざまな活動呼び起こす第1歩になる。今後、日本の英語教育において、文学教材はどのように扱われていくのか。文学教材はどこへ行くのか。教師が、生徒・学生と協同でよりよい授業作りを目指していく1つ1つの試みが、その行方を決める大きな原動力になる。

教室をコミュニケーション能力育成の場にできるか否か—その責任の一端は、文学教材とそれを活用する教師の力量に依っている。